

情報共有

非常管理文書

9/24 20:50 広報班

取扱注意 公開不可

(6枚)

プラント状況 (本店会見) 議事メモ

日時：平成 23 年 9 月 24 日 (土) 18:00~19:15

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 20 名 (カメラ 3 台)

当方：原子力・立地本部 [redacted]
原子力設備管理部 [redacted]
原子力運営管理部 [redacted]
広報部 [redacted]

配布資料：

- ・福島第一原子力発電所の状況
- ・福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について (第百八十三報)
- ・福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水中に含まれる放射性物質の核種分析の結果について (9月23日採取分)
- ・福島第一原子力発電所タービン建屋付近のサブドレンからの放射性物質の検出について (9月23日採取分)
- ・集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果
- ・福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (水位・圧力・温度などのデータ)
- ・写真でお示しする福島第一原子力発電所の現状
- ・【動画】福島第一原子力発電所 2号機原子炉建屋内の状況
- ・【動画】福島第一原子力発電所 3号機原子炉建屋上部の状況

[redacted] よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

- Q. 動画内の 2, 3号機の湯気はどこから出ているものか。
- A. 2号機は注水している水由来と考えている。3号機は建屋が破損しているため、注水、もしくは雨水由来のものが湯気になっていると考えている。

Q. 今後、湯気そのものの核種を調べる予定は。

A. 湯気そのものの核種を調査することは困難であると考えている。3号機であればテント状のダストサンプラーをオペフロ上部の瓦礫の真上に置いてサンプリングしている。2号機はブローアウトパネル部でダストサンプリングをしている。

3号機の場合は湯気の流出場所が見えてきているので、ある程度サンプリング場所を特定していきたい。

Q. 8月24日にサンプリングした際に撮影した映像が本日公表された理由は。

A. 資料映像があることが確認できたので提供した次第。

Q. 2, 3号機ともオペフロは5階になるのか。

A. その通り。

Q. 水素濃度計は手配できたのか。

A. まだ手配できてないが、広範囲に測定できる水素濃度計を手に入れたいと考えている。

Q. ガス管理システムは元々9月下旬にスタート予定だったと思うが、どの程度遅れると考えているのか。

A. ガス管理システムについては2, 3号機から着手することを考えており、現在、ロボットによる調査を進めている。クインス等でカメラ等を使って非常用ガス処理系の配管つなぎこみ部の線量等を確認し、工事が可能か確認する予定。

1号機については具体的にいつから着手するか予定はされていない。

Q. 2, 3号機の工程へ影響はないのか。

A. 今回、格納容器内の気相部分でつながっている箇所は水素が蓄積している可能性があることがわかったため、同様の配管部等には水素があるとの前提で作業計画を立てることとしている。水素が確認された場合、窒素をパージする等の作業が必要であると考えている。

Q. 2, 3号機の工程に少しでも影響は出るのか。

A. これから作業計画を反映していくので現時点で実質的に遅れていると言うことにはなっていない。

- Q. 2, 3号機について、9月内の着工は遅れが出るのではないかと。
- A. いつまでにやらなければならないというものではない。現時点まずは現場の調査をしており、来週からは接続口を確認してホースをつなぎ込む必要があると考えている。
- Q. 1号機について、作業の遅れは出る見込みか。
- A. 1号機についてはスケジュールそのものがはっきりとしていない。CCS系の配管を切り出す候補として準備作業を先行しているところ。配管を切り出す作業は遅れるが、1号機全体の工程にどの程度影響が出るかはわからない。
- Q. 写真の⑦（湿分分離器）について、重要な設備で影響がなかったとのことだが、コンクリートのようなものがぶら下がっていて損傷が激しく見えるが問題ないのか。
- A. 当該写真は湿分分離器のブロー弁でタービン建屋地下1階にある。高圧タービンを通った後の蒸気の湿分をとって低圧タービンに入る前に取り除いた湿分をブローするための弁で、通常運転時に必要なものである。コンクリートのように見えるものは、保温材部分がはがれ落ちたものではないかと考えている。
- Q. ガス管理システムについてはステップ2でどこまでが目標か。
- A. 格納容器のガス管理システムの着手までがステップ2の目標である。
- Q. 今回、水素が見つかったことで、ガス管理システムを稼働することにより水素を取り除こうとも考えているのか。
- A. 水素の存在が確認されているので、出来るだけ早く稼働させたいと考えている。
- Q. 可燃性ガス濃度計の測定において、何度か測定しても100%以上を示してやがて0%になったとのことだが、測定により、水素を出しても出しても格納容器側から新たに水素が生み出され続けていると言うことか。
- A. 水素自体が格納容器内で水の放射性分解により一定量発生したと考えているが、格納容器のリングスパーチャーを通じてCCS系配管内まで入り続けてきているとは思わない。配管内に溜まった水素の一部が計測時に出てきているものと考えている。

Q. 測定により一回弁を開けてまた閉めて、再度開けたら計測されるということは次々に出てきているということではないのか。

A. 配管内にはまだ水素が残留しているため、開けて閉めてもまた出てくると考えている。母管は直径約 30センチ程度あるので相当量の水素が入っていると考えている。

Q. 可燃性ガス濃度計の計測時に全て水素を出してしまわなかったのはなぜか。

A. 今回はガスの濃度を確認してみると言うことで計測をしていて、水素を抜くための作業をやったわけではない。計測時にはガスがしっかりと拡散されれば良いが、着火してしまうリスクもあるので、手段を検討していく必要がある。

Q. 今回、作業の過程で見つかったということは事故後の約半年間、そこに水素があったことに初めて気づいたと言うことで良いか。

Q. 事故後、MO11、12 弁は閉まっており、今回、12 弁より下流側は水をブローした。それまでは水が張られた状態で、水より格納容器側に水素が溜まっている状況であったと考えている。

Q. 2号機の圧力容器ペローシール部の温度は再度下がったが、計器不良だったのか。

A. 95℃から本日5時の時点で22度上昇したが、その後、100℃まで下がった状況である。圧力が上下しているのは計器不良とも考えている。また、湿気等で熱電対の導通状況が悪くなっているかもしれない。引き続き、様子を見てまいりたい。

Q. 5, 6号機の写真について、原子炉建屋地下のたまり水の写真はないのか。

A. No.24 が原子炉建屋の周りにある複合建屋での写真でたまり水の写真である。

Q. 非常用発電機の写真はないのか。

A. No.14 と 15 が非常用発電機の写真である。

- Q. 水素ガスの計測において、一度閉めてもまた中の圧が上昇して水素が出てくると言うことは中にある水素が多いと言うことか。
- A. 一旦 100%を振り切るので、配管内には相当量水素が溜まっていると考えている。万一、水素が溜まって火がつくと大変なので、検出の目的で一時的に弁を開けて分析したもの。
- Q. 配管内の容量はどのくらいか。
- A. 直径が 300 ミリで格納容器から約 14mあるので 1 m³ 程度である。
- Q. 現状、格納容器の内部にどのくらい水素があるのか。
- A. 格納容器の中の水素は 1%未満。類似の配管においては水素はあるのではないかと考えている。水素ガスの発生量については、水の放射線分解が現状の発生源であり、毎時 0.4m³/h とみている。よって窒素ガスを 28m³/h 注入しているところ。
- Q. 地震発生後、これまでにどのくらい水素が発生したのか。
- A. 現状滞留している量としては 1%未満ではないかと考えている。
- Q. 2・3号を先行とのことだったが、1号の当該配管のようにガスが滞留している可能性があるのではないか。
- A. 2・3号も水素ガスが発生していることから、類似の配管にガスが溜まっている可能性がある。
- Q. 当該配管の水素は数ヶ月もあれば配管から外に抜けるのではないか。水素が 100%で滞留しているというのはどのような評価をしているのか。
- A. 具体的な評価はしていないが、10 ミリの厚さがあることから、水素が漏れているような状況ではないと考えている。数ヶ月に渡って溜まっているのは異常な状態ではない。
- Q. 次回の水素計測時に、作業周辺環境の水素濃度を下げることは難しいのか。
- A. 静電気等の着火源に気をつける、袋に水素を補集するなどが必要な対策と
考えている。
- Q. 万が一、静電気等が発生し爆発になった際にはどの程度の爆発になるのか。
- A. どの程度かについては一概には何ともいえないが、大爆発ということではないと考えている。

- Q. 計測作業の安全についてはどのように実施するのか。
- A. 具体的な作業計画ができていないことから、今後あらためて計測する際に作業計画を立てたい。
- Q. 5・6号機建屋内の汚染水、メガフロート、仮設タンクの水量は。
- A. 8月11日以降移送おらず、現状7,150トン、仮設タンクは9,000トン、タービン建屋については水位管理している。
- Q. 5・6号T/Bの溜まり水の量の現状は。
- A. 確認する。
- Q. 4月に5・6号機建屋の滞留水を海洋に放出していたが、その放出量は。
- A. 4月に放出したのは5・6号機のサブドレン水。量としては確認する。
- Q. 4月にサブドレンからの放水時に、建屋側に地下水が流入し、発電機が浸水する危険性があることが放水の理由との説明を受けたが現状はどうなっているのか。
- A. 4月の時点で、危機感をもっていたのは原子炉建屋の非常用ディーゼル発電機室の浸水。現在汲み出しているのはタービン建屋の滞留水。なお、現状、月に1～2回、原子炉建屋からタービン建屋に溜まり水を移送している。
- Q. 水の放射性分解で水素が $0.4\text{m}^3/\text{h}$ できるとのことだが、その際に酸素はどれだけできるのか。
- A. 1対2であり $0.2\text{m}^3/\text{h}$ 。格納容器内で拡散している状態。水素ガスは軽い気体であり、上の方に行きやすく、酸素は重い気体であり下の方に溜まる傾向はあるが、N₂封入・格納容器内の温度により対流していると考えている。
- Q. 水素と酸素が接触することはないのか。
- A. 均等に攪拌されていると考えている。

以上